論 文 審 査 の 要 旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	佐治　正太
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題　目 Individualized Management of Vasa Previa and Neonatal Outcomes （前置血管の個別管理による新生児転帰の検討）
	掲載誌 The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research 2023;49:2680-2685
	主査　小林　泰之 副査　清水　直樹 副査　冨田　隼人

［論文の要旨・価値］【緒言】前置血管は、ワルトン膠質に包まれない脆弱な臍帯血管が内子宮口上の卵膜上を走行する異常で、破水時に臍帯血管が断裂することが多く、知らずに経腟分娩を試みれば、ほとんどが胎児死亡を含む重篤な結果に至る。頻度は比較的まれで妊娠中は無症候で致死的な異常であることから、妊婦健診で妊婦全例に対して超音波断層法を施行して緻密なスクリーニングを行う必要がある。さらに、破水や分娩開始となると臍帯圧迫や断裂のため急激な胎児機能不全・胎児死亡を起こすため、妊娠中の超音波診断と破水前の帝王切開が必須である。従来、前置血管例では予定帝王切開の時期を妊娠 34-35 週の早産期にすることが推奨されているが、我々は前置血管のリスクと胎児の発育とのバランスを考慮した帝王切開の時期の決定も考慮すべきであると考えた。また、前置血管では安全目的の管理入院も考慮されているが、我々は適切なリスク評価を行って入院管理の必要性を検討すべきと考えた。本研究では、これらのことを考慮した我々の前置血管に対する管理指針の妥当性を明らかにすることを目的とした。【方法・対象】本学の総合周産期母子医療センターで 2014 年から 2021 年の間に、妊娠中に前置血管のスクリーニングで前置血管と診断した例を対象とした。前置血管の超音波スクリーニングは、妊娠 18-20 週の胎児超音波検査時、及び、妊娠 24 週の前置胎盤のスクリーニング時に行った。転院紹介例では来院同日にそれらのスクリーニングを行った。妊婦健診での管理は、子宮収縮の有無の確認、子宮口開大所見、胎児発育、胎児心拍数陣痛図(CTG) を観察し、異常を認めない場合は管理入院を行わず外来管理とした。何らかの訴えや異常がある場合は管理入院とした。入院中は、連日の CTG、1 週間毎の超音波検査、子宮口の評価を行い、異常がない場合は妊娠 36-37 週に帝王切開を予定した。子宮口開大徴候や CTG 異常が出現した場合は帝王切開のスケジュールを早めた。本研究では、これらの前置血管例を対象に周産期予後と新生児転帰を検討・分析した。【結果】対象期間の全分娩 5150 例中、妊娠中に前置血管と診断したのは 14 例(0.3%)あった。超音波スクリーニングにおいて偽陽性、偽陰性ともに認めなかった。対象のうち 5 例(36%)は全例に行う超音波スクリーニングで診断し、9 例(64%) は何らかの理由で他院より紹介時に診断した。5 例(36%) は異常なく分娩まで管理入院を要さなかった。我々が入院管理を要すると判断したのは 4 例(29%) あり、理由は胎児発育不全 1 例、切迫早産 3 例であった。その他の 5 例は、我々は管理入院不要と判断していたが、妊婦の希望で妊娠末期に管理入院をした。8 例(57%) は妊娠 36 週以降の選択的帝王切開で分娩した。そのうち NICU 管理を要したのは 3/8 例（新生児一過性多呼吸）あった。一方、予定帝王切開の日程を早めた例（いずれも妊娠 32 週以降）は 6 例(43%) あり、切迫早産 3 例、CTG 異常 1 例、胎児発育不全 1 例、双胎妊娠 1 例であった。そのうち NICU 管理を要したのは 4/6 例（新生児一過性多呼吸 3 例、低出生体重児 1 例）あった。いずれの新生児においても重篤な合併症で長期入院を要した例はなかった。【結論】前置血管であっても症例ごとのリスクに応じた妊娠管理を行うことで母児のよりよい転帰につなげられる可能性があることを示した。

［審査概要］学位審査は、2025 年 2 月 21 日に主査・副査及び 1 名の陪席者を伴って、申請者の約 20 分間のプレゼンテーションの後に、審査員から研究目的、研究方法の詳細や妥当性、結果の解釈、考察の妥当性、研究の臨床的意義に関して約 60 分間の質疑応答を行った。申請者はこれらの質問に対して懇切丁寧かつ的確に回答した。

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

［研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価］研究発表と質疑応答から、申請者は当該研究領域に関する深い専門知識を有しており、十分な研究能力を有すると判断した。語学力に関しては、参考文献の中から和訳をしてもらって評価したが十分な能力があると判断した。審査では常に真摯な態度で礼儀正しく、申請者は学位授与に値すると判断した。